

豊臣秀吉朝鮮侵略の史跡を訪ねて(一)

中 川 浩 一

『流通経済大学論集』第三十三巻第四号に「続・日韓交渉史跡探索」を執筆後、数年来調査を続けてきた朝鮮通信使の足跡を求めて、壱岐に渡島したおり、豊臣秀吉による朝鮮侵略の史跡がこの地にも存在する事実¹に気付かされた。ところで日本国内に残るこの種の史跡としては、渡韓の拠点となった肥前名護屋城跡、京都の豊国神社鳥居前に建つ耳塚が広く知られてきたが、具体的な紹介が少ない史跡がほかにいくつか存在する。それらの中から伊達政宗ゆかりの臥龍梅、神津島のおたあ・ジュリアも選んで、現地探索の記録をまとめてみた。

壱岐北端に残る朝鮮侵略の拠点

長崎県壱岐郡を構成する壱岐島の北西端に位置する勝本が、朝鮮通信使の寄港地であった事実は、日韓双方の史書に記されている^{注1}けれども、勝本が豊臣秀吉による狂気の朝鮮侵略に際して、中継拠点として機能した事実は、広く知られていないように思われる。佐賀県立名護屋城博物館は、朝鮮侵略の本拠地として築城され、秀吉死後に廃城となった名護屋城のかたわらに建ち、日韓交渉にかかわる史実を展示の対象にした施設であるけれど、一九九五年に開催された特別企画展「唐入り」の図録では、松浦鎮信が側室とした朝鮮女性にまつわる史実をふまえて、壱岐は登場するだけであった。^{注2}

ところで、朝鮮通信使寄港地の踏査を目的として、一九九九年三月に勝本を訪ねた処、勝本町観光協会刊行のパンフレット「かつもと―海と

イルカと温泉の町」の中から、朝鮮侵略にかかわる史跡が存在する事実を「発見」した。市街とY字状に湾入する港を見下す標高八二メートルの丘陵としての城山に築かれた山城がそれである。パンフレットは、頂上付近の写真に添えて、城山公園（勝本城跡）と題しながら、勝本港を見渡す丘の上にあり、豊臣秀吉が朝鮮出兵に際し、急造した勝本城跡の一部が公園となっており、大手門の石垣が、僅かに往時を偲ばせてくれます³とする説明を収めていた。

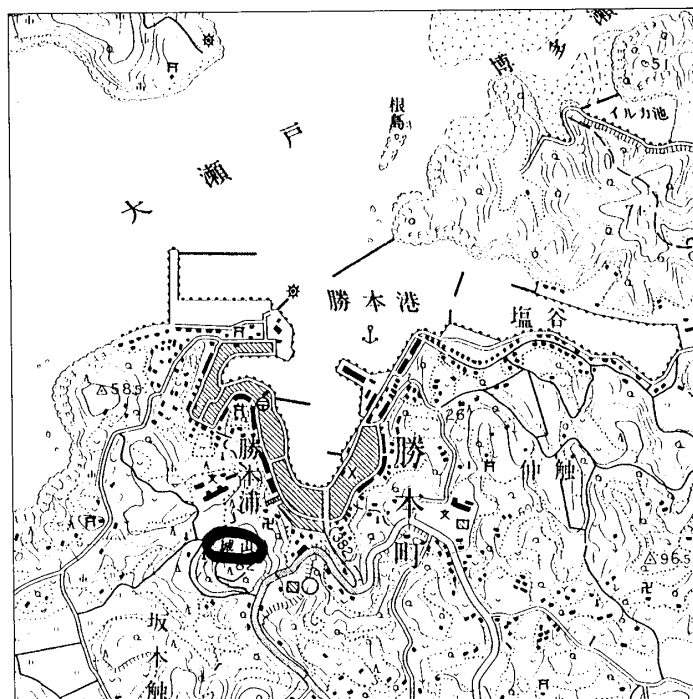
勝本城跡の位置は、二万五千分の一地形図に「城山」の表記があるのに加え、壱岐島南岸に位置して名護屋城跡に近い佐賀県東松浦郡呼子からのフェリーが着く印通寺へ通じる国道三八二号線⁴の路肩に、史跡案内の標識が建って、容易に判別できる。

石垣と枳形が残る勝本城跡

勝本港を見下す丘陵の斜面に建つ旅館に一泊のうえ、朝鮮通信使にかかわる史跡の現況を教育委員会に問い合わせる用務もかねて、勝本城跡を訪ねてみた。教育委員会の事務室は国道三八二号線に臨み、町役場庁舎に隣接する文化センターの一階に設けられている。

二万五千分の一地形図から読みとれる様に城山には周回道路があり、さらに山頂へ通じる歩道が分岐する。そのかたわらに、史跡の由来を説明する表示板が建てられ、次の文を収めていた。

長崎県史跡 勝本城跡



地図① 1:25,000「勝本」昭和59年修正
○が勝本城跡の位置

安土桃山時代の山城(山の頂上や中腹につくられた城)。豊臣秀吉は、唐入り(秀吉の朝鮮出兵のこと、朝鮮国では壬辰、丁酉の倭乱、明国では明暦朝鮮役とよばれた)にさいして肥前名護屋(名護屋城)に本拠を置き、朝鮮半島への飛石的な位置にある老岐風本(勝本城)と対馬府中(清水山城)に出城を築き、上対馬の撃方山と朝鮮釜山浦とを結ぶ補給路とした。

一五九一年(天正一九)九月、秀吉の命をうけた老岐の領主松浦鎮信(法印、平戸領主)は城山(海拔七八・九メートル)の頂上に城を築きはじめ、有馬晴信、大村善前、五島純玄のたすけをうけ、短期日のうちに完成させたと伝えています。

『老岐名勝図誌』には、城のありさまを、子城の址、竪四十七間一尺、横二十四間、玄の方に門跡ありと伝え、当城築立の砌本多因幡守七



写真① 勝本城跡から俯瞰した勝本港(1999年3月写)



写真② 勝本城の柵形跡と石垣 (1999年 3 月写)

年の間、城番として在任せしと勝本城番の名を伝えていきます。

現在、城跡には、対馬に向って設けられた柵形と石垣の一部、頂上の平地には柱の礎石らしきものがのこっています。これらの城郭遺構は、天正―慶長期の確実な資料として非常にたいせつです。木造建築物は戦いの終了とともに、とりこわされたと伝えられています。

勝本城は別名を、武末城 風本城、雨瀬包城ともいいます。

勝本町

簡にして要を得た記述であり、朝鮮侵略の呼称を、日・韓・中の三通りにわけて記載する心配りも読みとれる。こうした配慮は、かつて「朝鮮征伐」と表記して、在日韓国人からきびしい抗議を受けたことへの反省に基く由である。

頂上に足を運ぶと、名鳥島、若宮島によって玄海灘の風波を防ぐ勝本港が展望できる。石垣と柵形の遺構は北側斜面に臨む形で残っていた。

後方支援で渡韓した伊達政宗

豊臣秀吉の朝鮮侵略が、朝鮮人技術者の強制連行を惹起した事実については、例えば「朝鮮から連行された陶工によって、すぐれた技術が伝えられ、有田焼や萩焼、薩摩焼など、のちに各地で名産となる磁器や陶器が生まれた」と注³と中学校社会科の教科書に記されており、人口に膾炙する事実となってきた。しかし実際には、老若男女にかかわる多数の人々が連行され、奴隷として売買されたのが歴史の事実であった。注⁴

豊臣秀吉による朝鮮侵略は、略奪も伴った。その結果が、「寺宝」の形で四百余年も継承されてきた事実を前稿で指摘したが、本稿では伊達政宗とのかかわりで記述しよう。

幾多の抗争に勝利して奥羽一円を征覇した伊達政宗も、天下統一を呼号する豊臣秀吉には抗しえなかった。それゆえ当然の帰決として、「唐入り」を指向する朝鮮への出兵に際して、伊達政宗も参加を余儀なくされている。

伊達政宗の朝鮮渡海は、文禄二年三月十五日に名護屋城下で乗船、風

待ちのうえ二十日に出帆、老岐、対馬を経て四月十三日に釜山到着の日程で実施された。前年四月十二日に小西行長、宗義智連合の第一軍が釜山に上陸して始まった「文禄の役」（壬辰倭乱）は、首都漢城を五月三日に陥す「成果」をあげはしたが、朝鮮の宗主国である明の派兵によって、政宗渡海時には日本軍は窮地にたっていた。

文禄二年一月、小西行長は明朝連合軍に敗北し、平壤城を放棄して漢城へと敗走した。加えて翌月、漢城奪回を策する朝鮮軍の拠点幸州山城への攻撃は、無惨な失敗に終わっていたのである。

伊達政宗の渡海は、戦況不利となった日本軍の後方支援であり、釜山到着後は尉山へと移動した。当時の尉山は、義軍の拠点となつて日本軍の手を離れていたが、浅野幸長、伊達政宗の連合軍は、小争いの後、尉山再占領をなしとげている。^{注5}

記念に梅樹を持ち帰った政宗

文禄二年四月、漢城集結の日本軍は撤退のうえ、釜山付近に集結したが、この時点で明との和議交渉が始まっている。そうして実効支配の欠除にもかかわらず、慶尚、全羅、忠清、京畿の南朝鮮四道の割譲を要求することへの裏付けとして、慶尚南道に位置する晋州城攻略が六月に実施された。官兵・義兵約七千と六万人ほどの民衆が籠った晋州城攻略は、死屍が山をつくる大虐殺を伴ったが、伊達政宗の軍勢も戦いに加つたと称される。^{注6}しかし、北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』に収載の「晋州城攻防図」は、伊達政宗の軍勢を欠いている。攻略の主役は、歴戦の九州、中国方面の武将が率いる軍勢が勤めたからであろう。

伊達政宗の朝鮮出兵については、菩提寺である松島青龍山瑞巖圓福禪寺に伝えられる「伊達政宗公甲冑像」が、「瑞巖寺宝物館」に展示されて、その一端を伝えている。宮城県文化財に指定されているこの像については、文禄二年（一五九三）公二七歳、朝鮮出兵の雄姿を再現した等身大の木像。公一七回忌に夫人陽徳院の発現で制作された^{注7}との説明がある。^{注7}

伊達政宗の朝鮮在留はおよそ一年半で、文禄三年九月に釜山出帆、名

護屋に帰陣した。これは明との和議交渉の進展に伴い、渡海した大名を順次帰国させる手配を秀吉がなしたのに伴うものであった。最初の帰還が、伊達政宗であったという。^{注8}

帰国にあたり、伊達政宗は、「朝鮮之役載二梅一而帰、栽之後園」詩以紀」と題して漢詩を詠じている。「絶海行軍帰国日、鉄衣袖裏裏三芽、風流千古餘三清操一、幾歳閑看異城花」と賦した内容から、渡海記念として梅の若木を持ちだした事実がうかがえる。以来四百年を過ぎた歳月に耐えて、いまは老木となった一对の白梅、紅梅が、瑞巖寺の境内で毎年さき続けてきた。

樹齢四百年を越える紅白梅

JR仙石線を松島海岸駅で降りて駅前を通る国道三四六号を北へと歩み、遊覧船発着場を右にみて五大堂の前を過ぎると、左手に瑞巖寺参道を構成する門前商店街が姿をみせる。参観料支払いの受付を配する山門を抜けると、右手に什宝物約三万点を収蔵する瑞巖寺宝物館としての「青龍殿」が眼に入る。平成七（一九九五）年十月一日にオープンし、常設、特別展示の方式で参観に備えるこの施設は、すでに支払った参観料によって見学可能である。展示室が地下一階に配置される特異な様式で、「伊達政宗公甲冑像」は常設展示の目玉となっている。

瑞巖寺宝物館、ついで庫裡を右にみて参道を歩むと、左右に白壁の塀を連ねる「中門」にゆきつくが、左手には藩主参詣に専用する「御成門」が配される。

切妻造、柿葺の四脚門としての「中門」を潜ると、正面に「方丈」（本堂）が控えるが、その庭前に一对の老梅が植栽され、右手が「臥龍梅・紅」、左手が「臥龍梅・白」とそれぞれ名付けられてきた。それぞれに説明の表示がなされているので、次に転記しよう。

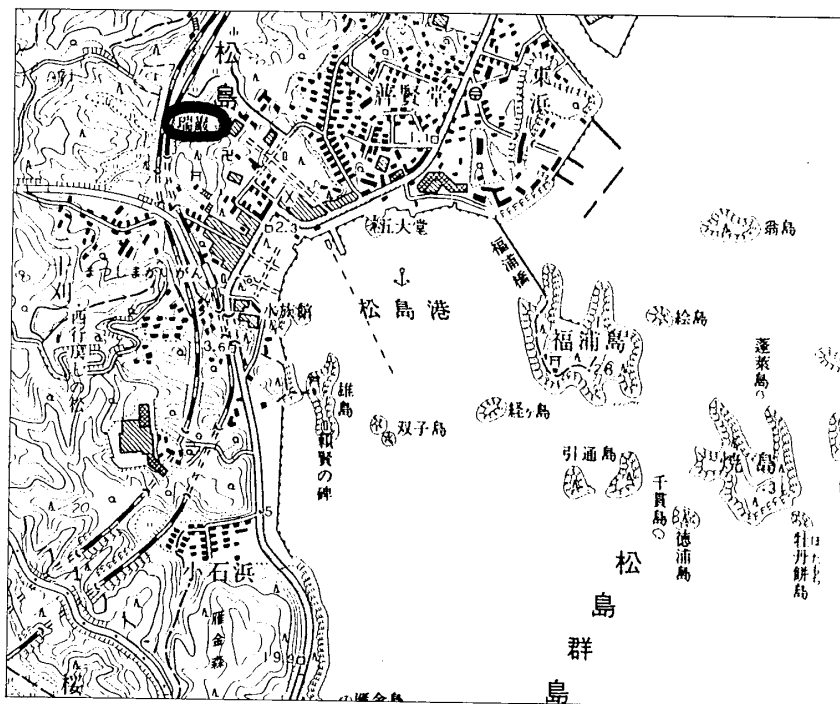
臥龍梅 紅

この梅は藩祖政宗公が朝鮮よりもち帰り、慶長十四年（一六〇九）三月二六日、瑞巖寺の上棟の祝いに手植えされた、紅白梅樹の紅樹であ

る。「臥せた龍」の姿をしているから、臥龍梅と名付けられている。紅白とも八重咲きで、花弁は二〇数枚、雌蕊七―八本雄蕊七―八〇本で、実を七―八个鈴なりにつけるので、別名「八つ房の梅」ともいう。

臥龍梅 白

紅と同時に植えられた臥龍八つ房の梅で、幹の周囲二・三m高さ八m東西十九m南北十四mに及ぶ。紅白ともに花期は四月二〇日前後、樹齢は約四〇〇年。宮城県指定天然記念物。



地図② 1:25,000「松島」平成2年修正
○が瑞巖寺本堂の位置
臥龍梅は参道が一番奥にある



写真③ 瑞巖寺の臥龍梅（紅梅）（1999年5月写）



写真④ 瑞巖寺の臥龍梅（白梅）（1999年5月写）

故国に帰った臥龍梅後継木

一九九九年三月二十六日、大韓民国の首都ソウルの中心市街を見下す南山の中腹に開設される南山植物園で、瑞巖寺の境内で三九〇年もの歳月を過した老梅から株分けされた一对の紅白梅が、母国帰還の植樹をなしとげた。伊達政宗が若木を舶載した釜山の地を選ばず、帰国の根をソウルに降したのは、伊藤博文射殺の「罪」を問われて旅順監獄に収容された大韓民国義兵中將の安重根が、宮城県出身の憲兵上等兵千葉十七と培った友情にちなむためだろう。毎年九月の第一日曜日に、千葉十七の菩提寺である大林寺（宮城県若柳町）で開かれる千葉十七、安重根合同法要へ瑞巖寺住職が参加されてきたのに加え、大林寺住職が日韓親善交流に力を尽されてきた事実が積み重なったの措置かと思われる。

南山植物園は、安重根記念館に隣接し、四百年あまり前の略奪に対する謝罪の場としても当を得たとの判断も選定の因になるかと思われる。

三月二十六日は、一九〇九年三月二十六日に、安重根が旅順監獄で処刑された因縁にちなんでいる。

「壬辰倭乱臥龍梅後継木還国式」と名付けられた式典は、「安重根義士殉国第八九周忌追念式」に引続いて行われた。開会の辞に続いて瑞巖寺住職平野宗浄師が、臥龍梅の株わけを行い、母国に帰還させるに至った経緯を講話された。続いて安重根記念館長鄭乗学氏が歓迎の辞を述べられた後、日韓双方の僧侶多数が読経する法要が営まれたのである。

式典は安重根記念館の展示フロアーに祭壇を設けて行われたが、続いて場を野外に移して、紅梅、白梅それぞれに植樹がなされている。TV局、新聞記者による取材もあり、翌日の「韓国毎日新聞」は、写真をつけてその状況を報道した。式典は、韓国政府、日本大使館からの参列もあって、日韓友和の実をあげたと理解されよう。

安重根義士 殉國 第89周忌 追念式 및 臥龍梅 還國式

式 順

司 會：徐 昌 俊 事務局長

1部：追念式（安義士紀念館）

10:00 - 11:00

- 一. 開會宣言
- 一. 國民儀禮
 - ・ 國旗에 對한 敬禮
 - ・ 殉國先烈 및 護國 英靈에 對한 默念
 - ・ 愛國歌 齊唱
- 一. 安重根義士 略傳 奉讀 本會常任理事 尹炳奭教授
- 一. 安重根義士의 (義學의 理由)奉讀 本會會員 安龍熙
- 一. 追 念 辭 理事長 鄭元植
- 一. 來賓 追念辭 國家報勳處長 崔圭鶴
- 一. 感謝牌 贈呈(서울市立劇團長 金義卿) ... 理事長 鄭元植
- 一. 追念歌(大韓國人 安重根 노래) 保聖女高 合唱團
- 一. 獻 花
 - ・ 理事長
 - ・ 遺族代表, 遺家族
 - ・ 來 賓
- 一. 萬 歲 三 唱
- 一. 閉 會

2部：壬辰倭亂 臥龍梅 後繼木 還國式（安義士紀念館） 11:00 - 12:00

- 一. 開會
- 一. 還國에 따른 經緯 및 人事 日本 瑞巖寺住職 平野宗淨
- 一. 歡迎人事 安義士紀念館長 鄭秉學
- 一. 法要式(불교의식)
- 一. 植樹(식수장으로 이동)

대한매일

THE KOREA DAILY NEWS 1999년 3월 27일



安重根의사 순국 89돌... 와룡매 한국식 26일 오전 안중근의사 순국 89주기 추념식에 이어 열린 '와룡매 한국식' 행사에서 뜻의사 숭모회 회원들이 뜻의사 동상 앞에 일본에서 숙적의 뜻으로 쓰여진 와룡매(臥龍梅) 모종을 심고 있다. 와룡매는 일제강점 당시 의장이 가져가 미야기(宮城)현 마쓰시마(松島)에 있는 사찰 瑞嚴寺에 심은 우리 고유의 매화나무이다. ●吳植植 cosing@daehanmaeil.com

臥龍梅後継木の植樹を報じた「韓国毎日」の記事



写真⑤ 臥龍梅還国式であいさつする瑞巖寺住職平野宗浄師（1999年3月26日写）

家康の侍女になった連行女性

朝鮮側では、回答兼刷還使と称した慶長十二年（一六〇七年）の第一次朝鮮通信使が、江戸で二代將軍徳川秀忠への謁見を果たして帰国の途についたおり、府中（駿府）で徳川家康との対面を実現した。往路に家康との対面を希望した朝鮮側の申し出に対し、隠居の身ゆえ、まず將軍に謁見し、帰路に立ち寄る様に要請した結果であるという。

ところでこのとき、駿府城の大奥に仕える身として、秘かに故国からの使節を見守ったであろう朝鮮人女性がいたのである。彼女の生来の氏名は伝わっておらず、日本名としての「おたあ」と切支丹の洗礼名である「ジュリア」が、今日伝わっているだけである。

彼女の数奇な生涯については、いくつかの文献があるけれども、入手が容易な『東京のなかの朝鮮―歩いて知る朝鮮と日本の歴史』（一九九六年）の記述に従ってみよう。この書物は、在日韓国・朝鮮人生徒の教育を考える会・東京を組織した小・中・高校の教員が、実地検証に基く成果を記したものである。

「おたあ・ジュリア」の消息が早い時点で明らかになったのは、イエズス会の神父ロドリケス・ジランが一六〇五年にローマ法皇へ送った報告書の中に、「公方さまの宮廷に仕えている侍女のなかに数名のキリシタンがいますが、その中にかつてアゴステイノ津守殿（小西行長のこと）の夫人に仕えていた高麗生まれの人がいます」と記されていたからであるという。^{注9}

彼女の来日については、「小西行長によって日本に連れてこられ、行長の夫人に仕えたことがわかっています」と『東京の中の朝鮮』には記されている。また「彼女の人生についてある程度のが分かるようになったのは、戦後もずいぶんたってからのことでした」と記す様に、章末に掲げた参考文献での初出は一九六九年である。そうであるとすれば、一九五五年刊行の岩波写真文庫『伊豆の大島』に収められた次の記述は、群を抜いた存在といえるだろう。

「流人の島」と題した項目を読み進むと、

慶長十七（一六二五）年オオタージュリアが流罪となった。オオタは秀吉の朝鮮征伐の際捕えられた朝鮮貴族の娘だが、家康に仕えキリシタンの罪を問われたのである。島内にはオタイネと呼ぶ地があり、また泉津、差木地では強情なものをオタイサマと呼ぶ方言が残っている。……

流罪で生涯を閉じたジュリア

おたあ・ジュリアが家康に仕えたのは、伏見城以来とされている。この時点で彼女が切支丹であったことは、前記の報告書に記されている由なのだが、切支丹となったのは、小西行長の夫人による感化と考えられてきた。

彼女が流罪になったいきさつについては、一六二二年、遂に家康は幕府の直轄地及びその家臣を対象にしてキリシタン禁教令を出します。家康の家臣団の中からは一四人のキリシタン武士が追放されるとともに、彼女たちの中からも数名が摘発され、棄教を強要されます。その中心人物がおたあ・ジュリアでした。しかし彼女の信仰心は迫害に負けるようなものではありませんでした。島流しが宣告され、彼女の身柄は町奉行に引き渡されましたと記されている。^{注10}

ジュリア遠島については、マテウス・コーロスによる一六二二年の報告書がある由で、次の様に記述する。

高麗生まれの娘で、並はずれて優れた判断力を持ち思慮分別があり、そのため公方からも宮廷のすべての人々からも尊敬されていた。それ故彼女の固い決心を知ったとき公方は憤慨して……高麗戦争の哀れな捕虜であり外国人であったのに日本の天下の支配者の宮廷で侍女にまで取り立ててやったのに……これほどの忘恩と強情は大いに罰せられて当然だ。……昨年（一六一二年）四月二十日に彼女を大島という島へ流すため、町奉行に渡すよう命じた。^{注11}

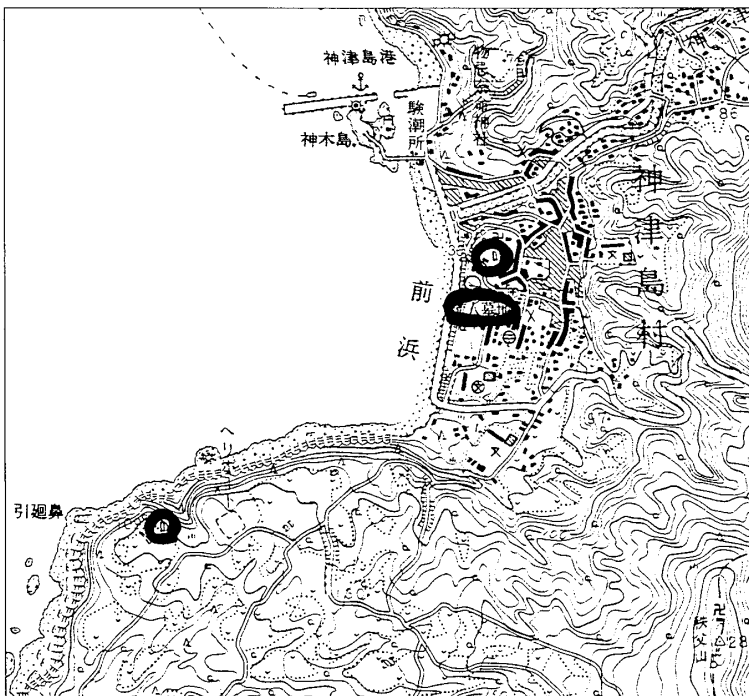
おたあ・ジュリアは、伊豆の網代から大島に流され、大島に約三〇日とどまった後、新島、ついで神津島に移され、ここで生涯を閉じたとき

れている。

神津島でのジュリアが注目されるに至ったきっかけは、島内唯一の集落に流入墓地として伝わる土地があり、そこに置かれた二層石塔を、郷土史研究家が、朝鮮式石塔と推定したことに始まる由である。

神津島に二つあるジュリア記念碑

『東京のなかの朝鮮』の記述に触発されて一九九九年二月、筆者は神津島に渡ってみた。往路は、伊豆半島南部の下田港まで、JRと伊豆急行を乗り継いだ。東京の竹芝埠頭を前夜に出港した東海汽船は翌日の午前中に神津島へ到着するのに対し、下田港を出港した神新汽船の便は、正



地図③ 1:25,000「神津島」平成3年修正
流入墓地の北に「ジュリア顕彰碑」、引廻鼻の東寄に
「ジュリア十字架」がそれぞれ位置する

午あるいは午後早くの時点で神津島に着き、翌日午前の東海汽船復航便までの間に、おたあ・ジュリアにかかわる事物の探訪を可能とする。

『東京のなかの朝鮮』では、神津島には流人墓地のほか、おたあ・ジュリア顕彰碑に加え、郷土資料館にジュリアコーナーが設けられているとのことであった。だが神津島探訪を志して入手したパンフレット『東京の島々―伊豆諸島・小笠原諸島』に収められた地図によると、南西端にも「ジュリア記念碑」の存在が記載されている。対する説明文は、キリシタンの殉教者 オタア・ジュリアを偲ぶ白亜の十字架の記念碑。朝鮮貴族の娘だったジュリアは、小西行長の養女となり、後に徳川家康に仕えたが慶長十七年（一六一二年）キリシタン禁止令に触れて流罪となった。大島、新島、神津島と配流になり、この地で四〇年間を過ごし、殉教。記念碑のある展望台は前浜と集落を一望出来る景勝地にある」となっているから、集落の中にある顕彰碑とは、明らかに別の存在と考えられる。

神津島へは平日の二月十六・十七日に渡島した。郷土資料館は閉館していても、村役場に電話すれば開けてくれると、『東京のなかの朝鮮』には書かれていたが、旅館で入手した神津島村郷土資料館の『しおり』には、夏期七月中旬―八月三十一日を除き土曜・日曜・祝日の開館とあり、村教育委員会に問い合わせてもその通りの答えて、ジュリアにかかわる展示を見学できなかったのは、心残りである。「しおり」によると、郷土資料館は、新館と旧館からなり、旧館は明治三十九年六月に島役場として建設され、昭和四十七年六月に新庁舎完成に伴い、改築修繕のうえ昭和五三年に「神津島郷土資料館」となった由である。収蔵資料増加に伴い、新館を建設したのは、昭和五十六年とされており、ジュリアコーナーは、旧館一階の一部を占めると記されている。

集落内の顕彰碑と墓を訪ねる

神津島の集落は南東部に位置する一個処だけで、中央部にそびえて火口を配する天上山から急傾斜で海へ注ぐ神津沢左岸沿いに建物が集中

し、海拔高度二〇―四〇メートルの台地上に展開している。

河口から急坂を登り、村役場を右にみて脇道に入ると左に保育園、それに隣接する小公園の一隅に、頂部に十字架の彫刻を配した「おたあジュリア顕彰碑」が建っていた。裏面には、次の文が記されていた。

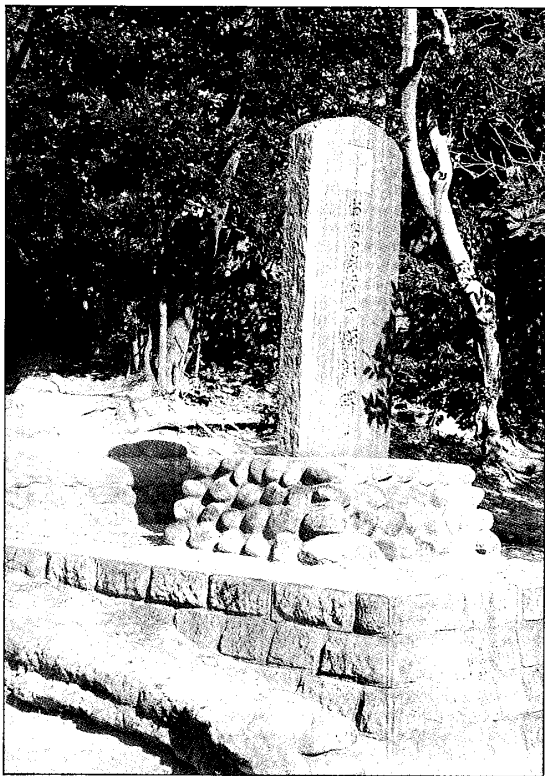
おたあジュリアは韓国に生まれ文祿の役に小西行長によりて日本に送られその妻の教化を受けて信仰の道に入り関ヶ原戦後は家康の側室に仕えるという数奇な運命を辿りしにも拘らず生来明るく優雅で慈悲深く勝れた思慮分別を持ち特に当時数多い切支丹の中で稀にみる有徳者であった。時の最高権力者である家康の命ずる棄教を拒み続け遂に神津島に流刑されて四十数年間孤島での苦しみの中で飽迄も節を曲ぐことなく信仰に殉じたのである。

この聖徳の誉れ高い婦人を永い間守り育てたわが郷土の勝れた風土を誇りとするものである。

昭和四十六年春

おたあジュリア顕彰会議

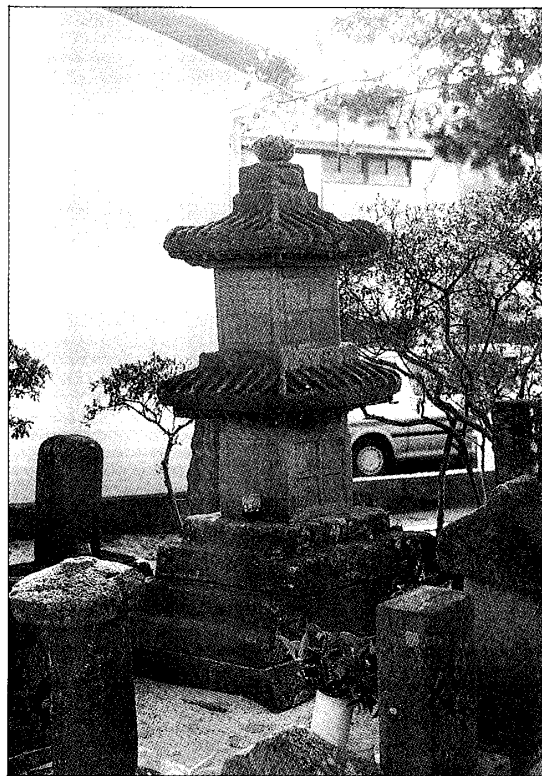
東京本所石勝刻



写真⑥ 集落内の小公園に建つジュリア顕彰碑 (1999年2月写)



写真⑦ 流人墓地の標識、奥の石塔が「ジュリアの墓」(1999年2月写)



写真⑧ ジュリアの墓と考証される石塔
(1999年2月写)

『東京のなかの朝鮮』によると、一九七〇年からは毎年五月の第三日曜日にジュリア祭が行われているという。^{注12}
道なりに二〜三分歩いて四つ角にでると、すぐ先が流人墓地であった。敷地は僅かで、ジュリアの墓とされる石塔は、すぐ眼に入る。墓地への出入口には、解説の表示板があり、次の様に記されている。

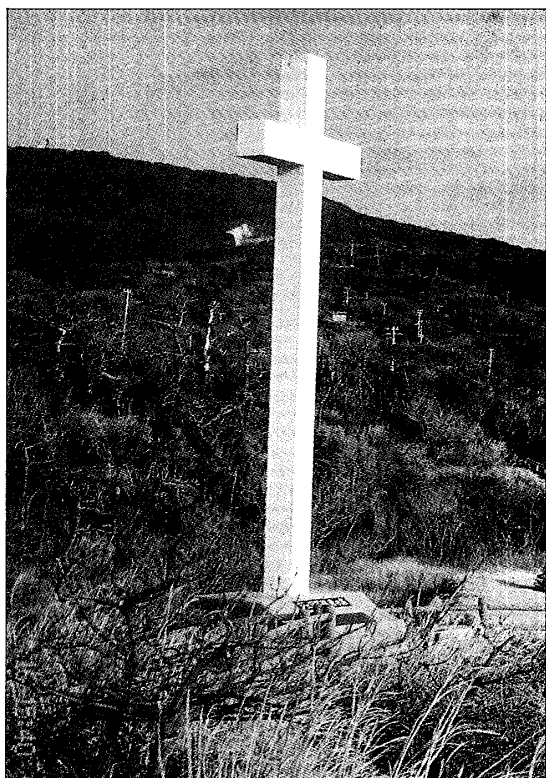
村史跡 流人墓地

所在 神津島村十二番地字須賀原

指定 昭和四十五年一月十日

この墓地は、古くから宝塔様又は篋塔様きやくたようといわれ、多くは江戸時代に流罪となった不受不施派の僧侶で、日照大徳の如く村民の師として崇敬を受けた者もあり、他宗派で無碑の者もある。元禄年間の者が多い。

西側の朝鮮様式の二重石塔は、慶長十七年(一六一二)春流罪となり、四十年間キリストの信仰に生きた聖女、オタア・ジュリアを祀った墓碑である。駿府城の大奥に仕え、家康に改宗を迫られたが権力に



写真⑨ 引廻鼻近くの断崖上に建つジュリア
顕彰碑 (1999年2月写)

屈せず、遠島の刑を受けた。生前、村民に深い感化を与えたと考えられる。昔から尊敬され、他の墓と共に香華を手向けて守り続けて来た貴重な墓地である。

昭和四十五年三月三十一日 建設

神津島村教育委員会

巨大な十字架がもうひとつの顕彰碑

もうひとつのジュリア顕彰碑への道は、幹線道路から分れ、神津村立中学校の脇を通り、南端に神津島空港が設けられる丘陵状の小半島への登り坂に通じている。ヘアピンカーブをすぎると、眼下に集落全体を見下す横道集落展望台があり、ついで三つ目の三差路で右に入ってヘリポートを右にみた先のゆるい坂道を下ると、右前方の断崖上に、巨大な白塗りの十字架が眼についた。道路標識には「ジュリア十字架」と記されたその基壇には、「ジュリア終焉の島」と題した石板に、次の顕彰文が記されていた。

おたあジュリアは朝鮮の役の遺児である キリシタン大名アウグスチノ小西行長によつて連れてこられ養女として育てられ カトリックの洗礼を受けて霊名をジュリアと名付けられた 関ヶ原の戦いで行長亡きあと家康の大奥に仕えたが慶長十七年(一六二二年)キリシタン弾圧で捕えられ 家康の命令を断固として拒絶したため 流罪の身となり伊豆大島に流されついで新島 神津島と移され 神津島で島の人によい影響をあたえてその生涯をとじた 彼女の墓は久しく島の人々に大切に守られ その遺徳を賛える祭りは昭和四五年(一九七〇年)五月二五日に第一回のジュリア祭として始まり今日に至っている

下山正義神父

昭和六〇年五月一九日建之

また基壇右の側面には、神津島おたあジュリア顕彰会 ジュリアの塔建立協賛会と刻む銘板が、左の側面には、一九八五年五月一九日駐日バチカン大使ウイリアム・アクイン・カルー大司教祝別と刻む銘板が、それぞれ取り付けられていた。

小公園の顕彰碑、流人墓地の説明板、十字架基壇の文章は、少しずつ表現が異なっているが、想像を混えて書いた個処があるからだろう。文禄の役、朝鮮の役と日本式の表記になっているのは、豊臣秀吉による朝鮮侵略への反省が充分にはなされていないためかと考えられる。

注

(1) 上田正昭編『朝鮮通信使―善隣と友好のみより』(一九九五年)明石書店一〇〇ページ。

国立中央博物館『朝鮮時代通信使』(一九八六年)三和出版社、一〇六ページ。

(2) 岡本顕實『秀吉の野望と名護屋城』郷土歴史シリーズ1(刊行年不記載)栄光印刷には、前線基地としての勝本城にかかわる記述がある。

(3) 『新編新しい社会 歴史』(平成八年検定済)東京書籍 一一九ページ

(4) 北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』(平成七年)吉川弘文館 二五九―二七〇ページ。

(5) 伊達政宗渡韓の行動については、仙台市立博物館に設置された市史編纂室の御教示によった。出典は『伊達治家記録』二―仙台藩史料大成（昭和四十八年）宝文堂

(6) 注5に同じ。

(7) 瑞巖寺博物館『瑞巖寺』（平成一〇年）三〇ページ。

(8) 鈴木武夫『伊達治家記録』二（昭和四十八年）五三ページ。

(9) 在日韓国・朝鮮人生徒の教育を考える会／東京『東京のなかの朝鮮―歩いて知る朝鮮と日本の歴史』（一九九六年）明石書店、三五ページ。同書によると、報告書の訳文は、木原悦子『おたあジュリアのアリランが聞える』（一九八八年）毎日新聞社からの引用である。

(10) 注9の三六ページ。北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』には、ジュリア・太田（おたあ）と表記のうえ、出典をルイズデメディナ、ファン・ガルシア『遙かなる高麗』と記している。

(11) 注9の三七ページ。

(12) 注9の三九ページ。